

---

# バカと兄弟と召喚獣

紫炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと兄弟と召喚獣

### 【Zコード】

Z5208Z

### 【作者名】

紫炎

### 【あらすじ】

一年生になつた吉井明久は自分の双子の弟共に遅刻していた。この物語はそんな二人と+を中心に進む物語である。

## プロローグ（前書き）

他にも書いている小説があるのですが、どうしてもこれが頭から離れなくなり書いてしまいました。

今までの作品と書き方を変えてあるので、「」意見、「」指摘がありますからどうぞ。

## プロローグ

桜舞い散る坂道を一人の少年が駆けていく。

「兄さん、 急げ！」

「わかつていいよー」

二人は道を走つていって、そしてとある学校の正門にたどり着く。

その学校の名前は文月学園。彼らはそここの生徒である。

走つてたどり着いた文月学園の正門には門を閉めようとしている先生がいた。駆けてくる二人に気づいたのか、門を閉めようとするとやめて二人に話しかける。

「遅刻だぞ、吉井兄弟！」

「ああ、おはようございます先生」

「あつ、鉄……西村先生」

「おはよう、明峯。それと吉井、今『鉄人』と言おうとしなかったか？」

「氣のせいですよ」

一人のそれぞれ異なった反応に西村先生は顔をしかめた。

俺こと吉井明峯は今回寝坊した兄さん、吉井明久と共に学校に遅刻した。昨日はあれほど言つたんだが……。

「それよりお前ら、一言足りないぞ」

「えつ？ エツト……？ 今日も肌が黒いですね」

「遅刻の謝罪よりも俺の肌の色が大事なのか、お前は……」

「兄さん、遅刻の謝罪だ」

「あつ、そうか。遅刻してすみません」

「……吉井、保健室に行つてこい」

「なんで！？」

ちゃんと謝ったのにどうして保健室に行かないといけないんですか。俺は呆れながらもとつと切り上げることにした。

「それより先生、例の紙を」

「うん？ ああ、そうか。ほれ」

西村先生はすぐ側の箱の中にある封筒を取り出すと俺たちに渡してきた。俺たちはそれを受け取る。

「振り分け試験の結果だ。よく見ておけよ」

「はあ～い」

封筒を受け取った俺たちは封筒の口を破つとする。

「吉井兄弟、今だから言ひ方がな

俺たちに封筒を渡すのと同時に西村先生が遠くを見ながらしゃべり出す。

「俺は去年一年間のお前達を見て、『もしかすると、吉井兄弟はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いたんだ」

「それは大いなる誤解ですね。そんな誤解をしているようじや『節

穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ?』

俺は封筒をゆっくりと開けたが、兄さんがまだ開けていないので待つとする。

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違えに気づいたよ」

「そう書いて貰えると嬉しいです」

やっと封筒を破いて中身を見る兄さん。俺も自分の結果を見ることにする。

「喜べ吉井兄弟。お前達への疑いはなくなった」

折りたたまれた紙を広げて、書かれているクラスを見る。

『吉井明久……Fクラス』

『吉井明峯……Fクラス』

「お前達は正真正銘のバカだ!」

「そんなバカな――――――――!」

予想外の結果にショックを受ける兄さん。俺は兄さんを慰めつつ、西村先生に一言文句を言つ。

「先生、俺たちの成績が悪いことは認めますが、いきなり『バカ』呼ばわりはどうかと思いますが?」

「そう呼ばれたくないなら、それ相応の成績を取るんだな」

西村先生の言葉にも一理あるため、俺は兄さんを慰めながらFクラ

すべと向かつた。

今日、この時から俺と兄さんの学年最低クラスの生活が始まった。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

## 設定（前書き）

今後も変更されると思ってます。

## 設定

人物設定	吉井明峯
年齢	17歳
性格	冷静な反面、とあることが関わるとボケに走るボケと突っ込みの両属性。
容姿	ほとんど明久と同じだが、体格はがつしりとしている。明久との相違点は髪型が刹那・F・セイエイ（2期バージョン）と同じ髪型であること。そんな髪型にした理由は不明。
その他	明久同様家事は良くする方で、ちょっとしたこだわりもある。武術と水泳をやっていたため、体力と運動神経共に高い。兄を暴力と不幸と理不尽から守っている。
召喚獣	?
好きな物	ガンダムOO 明久が作るパエリア
嫌いな物	
同性愛者、敵	
特技	喧嘩技、空手、柔道、水泳、銃の狙い撃ち

## 第1話（前書き）

書き方を分けて書くのって難しいですね。どちらかに固定しようかな？

それでは、どうぞ。

## 第1話

### 問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つあげなさい』

### 姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点  
合金の例……ジュラルミニン』

### 教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言つひつかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

### 土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つてなかつた事』

### 教師のコメント

そこは問題じやありません

### 吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すゞく強い）』

### 教師のコメント

す”く強いと言われても

#### 吉井明峯の答え

『問題点……マグネシウムで作られた鍋を使ったこと  
合金の例……CB製Eカーボン』

#### 教師のコメント

問題点はそれを聞いているではありません。合金に関しては趣味を”じつちやにしないでください。

#### 文月学園

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に“試験召喚システム”的導入により最新技術の実験場としても知られている。それだけに多くのスポンサーが付き、学費が極めて安い学園である。

そんな学校の校舎のとある一角。遅刻者である吉井明久と吉井明峯は2・Aクラスを覗いて驚愕していた。

「ものすごい設備だつたね、Aクラス」  
「程度つてものがあると思ひけどな」

明久はまるで別世界のようだと感嘆し、明峯はあまりの設備に顔をしかめていた。どうやら明峯の気にはそぐわなかつたらしい。

「兄さん、とつとFクラスに向かうぞ」  
「うん、分かっているよ」

二人はAクラスを後にして、Fクラスへと向かつた。

Fクラスへとたどり着いた二人はまた別の意味で驚愕した。

「……ミネ、僕は田舎の学校に来たつもりはなかつたんだけど」「兄さん、現実から目をそらすな」

あまりの落差に明久と明峯は驚愕していた。Fクラスの廊下側の窓や壁には所々亀裂が入つており、表札は真ん中から折れていた。

「これが格差社会の現実なんだね」「とにかく入るぞ」「うん」

落胆していた明久だが気を取り直して明峯と共にFクラスに入る。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」「早く座れ！このウジ虫やう！」

入つて早々罵声を浴びせられた。

誰だと思い、兄さんを押しのけて教壇の方を見る。そこには教師ではなく、悪友？こと坂本雄一がいた。

「何をしている、坂本」

「先生が遅れているらしいからな。代わりに教壇に立つてみた」

「いや、俺が言いたいのはそう言つことじやなくて……」

「俺がこのクラスの代表だからな。全員の顔を覚えておく意味でここに立つているだけだ」

「…………もういい」

俺は坂本に文句を言つのを諦めた。そこに初老のさえない男性教師が現れる。

「すみません、通してください」

「あ、すみません」

「先生、席順が分からないんですけど」

「席は自由です」

「席順も決まってないのー?」

席順も決まってないって……本当に大丈夫か、このクラス。俺は呆れながら、兄さんが座つた窓際の席の隣に座つた。全員座つたのを見て、HRが始まる。

「えー、みなさん。進級おめでとうございます。私がこのクラスを担任する……」

教師が振り向いて黒板に名前を書いつとしたが、

「福原慎です。よろしくお願いします」

チヨークがなかつたのか、書くのを断念してこりひりこ向き直つた。チヨークまでないとは……噂以上の酷さだな。

「皆さん、卓袱台と座布団は支給されていますか？　不備があれば、申し出てください」

不備があるかと言われても不備しかないような気がするが……。福原先生の話を聞いて早速一人一人手が上がる。

「先生。俺の座布団、綿が入っていないんですけど」「我慢してください」「俺の卓袱台、脚が折れています」「木工ボンドが支給されているので、後で自分で直してください」「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

「ここれから必要なものがあつたら、極力自分で調達するか、直すようにしてください」「これがFクラスなんだね、ミネ」「そうだな兄さん」

俺たちはこの現実を受け入れて「年間過」していくしかないようだ。全く、病人でも出たらどうするつもりなんだ。俺の心配を余所に自己紹介が始まる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。今年一年間、よろしく頼むぞい」

彼は木下秀吉。よく兄さんが『女の子』と間違える可憐な姿を持つ

男子だ。裏情報では告白された数がとうとう一〇〇桁に突入したらしい。しかも、男から。

「……土屋康太」

次は無口そうな男子、土屋康太だ。彼にはとある異名があるが、本人は名前で呼ばれたいそうだ。いつも自前のカメラを持つていて、あるシャッター・チャンスを狙っている。

「ねえ、ミネ。さつきから聞こえてくるのは男子ばかりだけど、Fクラスって女子はいないのかな？」

「さあ、聞いていれば聞こえてくるんじゃないかな？」

男子ばかりしか聞こえてこないため、兄さんが俺に話しかける。俺としては大助かりだ。兄さんは昔から女難に遭っているし、まともな女性に会った試しがないからな。

「……です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は……」

「うん？　この声って確かに……？　俺は声がする方を見ていると、そこには兄さんの天敵にして俺の敵でもある島田美波がいた。何故敵かって？　それは……」

「吉井明久を殴ることです」

ということだ。こいつは事あるごとに兄さんに殴りに掛かる。そのせいで一時期は軽い女性恐怖症に陥りかけたというのに……。俺は兄さんに笑顔で手を振ろうとする島田を、俺の体を使って兄さんの

視界から遮った。

「ミネ?」

「ん、何でもない」

兄さんが俺の行動に疑問を持つたが、俺は何でもないと軽く流した。かわりに島田からが俺に敵意を向けたが。その後は名前を言うだけの作業が続き、俺の番になつた。

「吉井明峯」

俺も名前だけ言つて着席する。兄さんが何か言いたそうにしたが、お構いなしだ。そして兄さんの番になる。

「吉井明久です。気軽に……やっぱり良いです」

「……兄さん、何を言おうとしたんだ」

「あ、あはは。ちょっと冗談を言おうとしたんだけどね」

気軽に『ダーリン』とでも? 古傷抉るようなマネはやめるべきだな。次の人に回りつつしたとき、急にドアが開く。

「あの、遅れて、すみま、せん……」

「えつ?」

急に開いたドアを見て、Fクラス全員が驚いた。そこには一人の少女がいて、こことは場違いとも言える人物、姫路瑞樹がそこにいた。

## 第1話（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

## 第2話（前書き）

ちょっとしたお知らせを『規格外』のほうに投稿しました。是非見てください。

それでは、どうぞ。

## 第2話

突如現れた女子、姫路瑞希に全員の視線が注目する中、福原先生が姫路に話しかける。

「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

緊張しながら自己紹介を済ませる姫路。どうして彼女が……と俺が考えている中俺と同じ疑問を持った生徒が一人尋ねる。

「はいっ、質問です！」

「あ、はい！なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

失礼極まりない質問だが、Fクラスにとつては当然の疑問である。彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1桁の順位に必ず名を連ねている学力の持ち主である。故に最高設備クラス、Aクラスになると誰もが思っていた。

俺もそう考えていたが、兄さんが振り分け試験の時に話したことを思い出して一人で納得する。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

そうなのである。振り分け試験の日に途中退席したと兄さんから聞いていた。だから0点にされたのである。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

姫路の理由を聞いてか、他の奴らも言い訳を始めた。俺は余りにも惨めに見えて、呆れていた。

「そ、それでは1年間、よろしくお願ひします！」

そう言つて姫路は俺たちの近くの席に座り、安堵の息をついて卓袱台に突つ伏す。兄さんは姫路のことが気になつてか、話しかけようとした。

「姫路さ」「姫路」

だが、そこで坂本が割り込む。坂本、貴様……。

「は、はい！ エーと……」

「代表の坂本だ。よろしくな」

「はい、よろしくお願いします」

ちやつかり自己紹介と等を済ませている。そして兄さんは固まつていた。兄さん……

「ところで姫路、体調は大丈夫なのか？」

「あつ、それ僕も気になる」

「よ、吉井君ー?」

坂本が体調を気遣うと、兄さんもそれに乗っかる形で話しかける。それに対しても驚く姫路。

「姫路、明久が不細工ですまん」

「……姫路、坂本が勘違いの『ゴリラ』ですまない。心から謝罪する」

割り込むばかりか罵倒されて兄さんがとても悲しい顔をしたので、俺もやり返す。

「えつ、えつと……」

二人同時に言われたせいが混乱する姫路。俺は姫路に構うことなく坂本と対峙する。

「てめえ、良い度胸じゃねえーか……」

「先に仕掛けたのはそっちの方だ。やるならやられる覚悟はあるだろ?」

互いに睨み合つ中、姫路はしゃべり出す。

「そつ、そんな事ないですよ? 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、その、むしろ……」

「まあ、見てくれは悪くないもな。俺の知人にも明久に興味がある奴がいるし」

急に俺との睨み合いを放棄して、語り出す坂本。何だ? 何のつもりだ……? 俺は突然のことには顔をしかめる。

「えつ、それって誰「それって誰ですか！？」わあー？」「確か、久保……利光だつたか？」

久保つて……、あいつは男だぞ。何て思つていたら兄さんが急に怯えながら抱きついてきた。顔も少し青ざめている。俺はしまつたと頭を抱えた。なぜかつて？　それは……

「坂本、その手の話はやめる」

「うん？　どうしてだよ？」

「兄さんはホモにトラウマがあるんだ。だから、やめり

「そうだったのか……それはさすがに悪かつたな」

「……お前、全然悪いとは思つていらないだろ？」

俺は坂本に注意するが、坂本はニヤニヤと笑いながら兄さんの今の状態を見る。こいつ……！　俺は坂本に一言文句を言おうとするが、パンパン！

「はいはい、その人たち静かに」

福原先生に注意され、やむなく断念する。ちつ、間の良い奴め……。俺は心の中で舌打ちをしながら、先生に謝る。

「あっ、すみま」

バキイ！　パラパラパラ……

「せ……ん……」

俺が謝つている途中に教壇が壊れた。……本当に学習をせる気があ

るのだから、ijiは、俺は本日何度かになるため息をついていた。

「……えへ、代えを持つてきますので、姫さんは自習をしていく  
ださい」

そう言つて福原先生は教室を後にした。クラスメートは自習するわけもなく、各自喋り始める。俺は先生が来るまでの間、怯えてしまつている兄さんを慰めることにした。

「兄さん、大丈夫だから、な？」

「う、うん。分かっているよ……」

兄さんは徐々に落ち着いてきたのか、俺を抱きしめる力を緩めてきた。その光景を見て、坂本はぱつぱつの悪そつな顔をする。

「……こりゃ、重傷のようだな」

「分かってくれたのなら、何よりだ」

「あの、何かあつたんですか？」

「ああ、昔にちょっとな」

俺は坂本と姫路に対して異なる対応する。兄さんも完全に落ち着いたらしく、俺から離れた。そこから兄さんと少し話していると、先生が帰ってきた。

「それでは、自己紹介の続きをお願ひします」

自己紹介が再開すると、名前と趣味程度の紹介でどんどん過ぎていく。そして坂本の番になった。坂本は席から離れて、教壇に立つて紹介を始める。

「代表の坂本だ。代表とでも坂本でも好きに呼んでくれ。さて、みんなに一つ聞きたいことがある」

そう言って坂本は教室の各所を見る。全員がそれにつられて、坂本が見ている場所を見る。

かび臭い教室

綿が入つてない座布団

脚の折れた卓袱台

割れた窓

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが……」

「不満はないか？」

「「「大ありじやあ-----」」

坂本の誘導に触発されて、Fクラスのほとんどが雄叫びを上げる。  
坂本の奴、まさか……

「どうう？ 僕だってこの現状に大いに不満だ」

「いくら学費が安いからっていつもこの設備はあんまりだ！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ！？ 余りにも差が大きすぎると！」

「みんなの意見はもつともだ。そこで代表としての提案だが……」

「」で坂本は一回区切つて、言い放つ。

「我がFクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つ！」

## 第2話（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

## 第3話

### 問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあつたついで、さらに悪いことが起きる喻え

### 姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

### 教師のコメント

正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”。（2）なら“踏んだり蹴つたり”、“弱り田に祟り田”などがありますね。

### 土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

### 教師のコメント

シユールな光景ですね。

### 吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面蹴つたり

### 教師のコメント

君は鬼ですか。

吉井明峯の答え

(1) 狙い撃てないロックオン・ストラトス

教師のコメント

もう一度言います。趣味どうじゅうぢやにしないでください。

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けよつと思つー。」

壇上に上がつた雄二の提案。それは戦争の開戦。だが、内容を知つてゐるクラスメートにとつては賛成するはずもなく、

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

非難の嵐が巻き起つた。当然と言えば当然、試験召喚戦争は成績が勝敗を左右すると言っても過言じやない。負ければ設備がランクダウンする。今の設備より下があるのかどうか不明だが……ともかく、それを知つているため誰もが反対なのだ。

だが、坂本はそれをものともせずに開戦の提案をしたとき同様に堂々とした態度を崩さずについた。ある程度治まつたところで、不敵な笑みを浮かべて口を開く。

「全員がそう言つのも分かる。だが、俺が勝算もなしにそんなことを言つと思うか？」

坂本がそう言つてどうこう事だ?と周りが騒ぎ始める。俺は何か考えでもあるのかと思いつつ、坂本の話に耳を傾けた。

「今からその根拠を説明してやる」

そつ言つて坂本はまず姫路の近くを見た。そこには、

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートを覗いていいで、前に出て来い」

「……！…（ブンブン…）」

「は、はわっ！？」

畠に顔をひつつけて、正々堂々と姫路のスカートの中を覗いていた変態がいた。そう、変態だ。こんなのが兄さんの友達なんて認めない。指摘された奴が覗きの証拠を隠しながら前に出てくる。

「紹介しよう、こいつがあの有名なムツツリーーだ

「……！…（ブンブン…）」

ムツツリーーと聞いて、クラスがざわついた。その名は男女それぞれ反応は違うがあるが正体は不明。その人物が今日の前にいる。

「バカな、奴がそうだというのか?」

「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしているぞ?」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「？？？」

周りがざわつく中、姫路だけは疑問符を浮かべていた。俺はそのままで知らない方が幸せだと思う。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。既にだってその力は知っているはずだ」

「えつ？ わつ、私ですか！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

彼女は前も言ったとおり、Aクラスの中でも上位に位置する。だから主戦力と言えば当然だろう。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」

「彼女ならAクラスにも引けを取らない！」

「ああ、彼女がいれば何もいらない」

さつきから姫路に対してもラブコールを送っている奴がいるが何なのだろうか。

「木下秀吉だつている」

「おお……！」

「アイツは確か、木下優子の……」

秀吉は学力ではなく、演劇部のホープとして有名だ。既に使えば撲乱としても使えるだろう。

「当然俺も全力を尽くす」

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれていたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人もいるって事かよ？ もしかしたらやれるんじゃないかな？」

「ああ、何かやれそうな気がしてきた！」

盛り上がるFクラス内の士気。俺は面倒くさいことになつたため息を吐いた。ただでさえ兄さんと共に教師の手元で追われているのに、この上戦争なんて起じつたか……

「それに吉井兄弟だつていぬー。」

シーン……

その瞬間、一気に盛り下がつた。そのままに反応して兄さんが文句を言い始める。

「ちよつと雄一一。ビリしてそ」で僕の名前を呼ぶのやー。全くその必要はないよね!?

「誰だよ、吉井兄弟つて」

「聞いたことないぞ?」

「そこら辺の雑魚じやねえーか?」

「ヤコ! 僕のことばびりでも呉こナビナネの事まで海獣するのは許さないよー。」

口々に愚痴り始めるFクラスの連中を見て兄さんが俺を庇つ。俺としてばどつでも良こののだが……俺は兄さんに落ち着くようになりまつ。

「ひよこ元気!」

「……(グッ)」

「兄さん、落ち着け」

「ミネ! でも……。」

「ソレで騒いてでもビリともならん。なら、水に流して聞かなかつた」と元気になつ

俺が兄さんを宥めると兄さんは悔しがりながらも引き下がつた。そ

れを見届けた坂本がさらなる追い打ちを掛けてくる。

「そりゃ、知らないよつなら教えてやる。そいつらの肩書きは×観察処分者くだ」

「……ツー（ガタツー）」

「兄さん…」

不名誉極まりない肩書きを明かされて拳を握り締めて立ち上がる兄さん。俺はそれを止める。兄さんも俺の顔を一瞬だけ見て落ち着いたのか席に座った。

「……それってバカの代名詞じゃなかつたか？」

「……フフツ」

誰かの咳きに俺も少し兄さんの怒りを晴らしあつと咳きに反応するかのように嘲笑する。それに反応する咳いた本人。

「……何だよ」

「いや、おかしな話だなつと思つてな」

「おかしな話？」

「そりだろ？ そのバカの代名詞と同じクラスにいるつて事はお前も“同類”つてことだろ？」

「なつ……！」

俺は仕返しが終わると同時に兄さんと共に席に着いた。先ほどの挑発に乗せられて若干名が敵意を向けてくるが俺は何ともないよつに受け流す。

「あ、あのー、観察処分者つてどういづものなんですか！？」

嫌な空気なつたのを払拭するかのように姫路が観察処分者とはビリ  
いうものか、質問する。坂本は即座に答える。

「あつ、ああ。観察処分者ってのは具体的には教師の雑用係だな。  
力仕事等の雑用を、特例としてものに触れられる召喚獣でこなすと  
いった感じだ。ただし、ファーデバックがつくがな」

坂本の言うとおりで俺たち兄弟は無償で教師達に対して雑用を押し  
つけられている。監視付きなので良いことは何一つとしてない。

「おいおい、それじゃあ試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦し  
いって事だろ？」

「だよな、おいそれと召喚できない奴が一人いるって事だよな」

口々にもまたしても俺たちに対して余計な荷物を持ったと愚痴り始  
めた。こいつ……！兄さんも事実のため反論できない。

「気にするな。どうせ、いてもいなくて同じような雑魚だ」

「だったら何のために言ったのさ」

坂本のフォローの“フ”の字もない言葉に憤りながらも押さえがち  
に呴く兄さん。

・・・・・・

俺は一つの決断をする。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服しよ  
うと思う！皆、この境遇には大いに不満だろ？！」

『当然だ！』

「ならば全員筆を取れ！出陣の準備だ！！」

『おお――――――――――』

「俺たちに必要なのは卓袱台じゃない！ A クラスのシステムでスクだ！」

『「つおお…………！」』

「お、おお…………！」

雰囲気に押されながらも姫路は小さく拳を振り上げる。兄さんはその懸命な姿に和んでいるいたが、そこに坂本から一言。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の為の使者になつてもいい。無事大役を果たせ！」

「…………ねえ、雄一それって確か「行こう、兄さん」えつ、ちょっと、ミネー！」

俺は兄さんが何かしら文句を言つ前に兄さんを引き連れて、教室を出た。後ろで何か坂本が言つているが無視だ。俺は何かと言つてくれる兄さんと共にDクラスへと向かつた。

「失礼します、Eクラスです。Dクラス代表はいますか？」

兄さんがDクラス入つて代表を捜す。そこから数分、代表らしき人物が現れた。一見すると平凡そつた少年である。

「俺がDクラス代表だけど……何か用かな？」

「あつ、はい。えつと…………！」

代表と名乗る人物が兄さんの対応に出でてくる。俺は後ろから兄さんの後ろにつく。

「僕たちFクラスはDクラスに対する宣戦布告をします」

『なにい！？』

「開戦時間は今日の午後からです。その時はよろしくお願ひします」

『試召戦争だと！？ 下位クラスの分際で生意氣な……！』

『生かして帰すな――――――――！』

「わつ、わああ！」

宣戦布告に對して生意氣だと逆ギレして襲いかかるDクラスの連中。代表もさすがに不味いと諫めようとすると、止まらない。俺は兄さんを脇に抱えると、ある手帳を取り出した。

「これは俺が偶然知ってしまった『清水美春、お姉様に捧げる愛のポエム集』の内容だ」

俺がいきなり見当違いのことを喋り始めるが、向こうはお構いなし。距離はそう遠くない。俺は回避体勢に入りながら、内容を喋り始める。

「『瞳 清水美春 吸い込まれるその瞳 見つめ……』

シユ！ 力力力カツ！！

「おつと」

「ぎやああ――――――！」

喋り始めた直後、どこからかナイフとフォークが飛んできてそれを避ける。あいにく俺たちのすぐ側まで來ていたDクラス連中は直撃したが。

「な、何！？ 何なの！？」

「ザキイ—————！ 何でその内容をあなたが知っているのですか！？」

いきなりの出来事に驚く兄さんを尻目に、直撃して倒れたDクラスの連中を蹴り飛ばして、叫びながら現れたのは、ツインドリルテールこと清水美春だ。俺は少なからずこいつと関わりがある。俺は手帳を仕舞いながら対応する。

「おいおい、人のことを死の呪文みたいに呼ぶな

「あなたなんて死の呪文で十分ですわーー！」

嫌われたものだと俺は苦笑しながらため息を吐く。

「大体何でその内容をあなたが知っているのですか！ 超極秘事項なのにい……！」

「ああ？ どうしてだろうな？」

俺ははぐらかしながら面白い反応をする清水をからかう。相変わらずからかいがいがある奴だな、こいつは。俺は抱えていた兄さんをおろす。

「ミネ、知り合い？」

「知り合いで、うより腐れ縁だな、こいつとは」

俺は兄さんに説明をしながら清水の方を見る。清水はなおも文句を言いたそうにしていたが、あることにハツと氣づく。

「あなたがFクラスと言つ」とは………

「ああ、安心しろ」

「何が安心ですか！？ ただでさえ強力なあなたがいるのにその上、

「 ブラコンパワーが発揮されたら……！」

ブラコンパワーとは失礼なと思いつつも、俺は清水に言い放つ。

「俺たちは出ないぞ？」

「……えつ？」

俺が言いはなつた瞬間、清水は固まつた。

### 第3話（後書き）

どうでしたか？

それではどうぞ。

## 第4話（前書き）

オリジナル展開があります。大筋の物語の変更はありませんけど。

それでは、どうぞ。

## 第4話

問題

以下の英文を訳しなさい。

This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.

姫路瑞希の答え

これは私の祖母が愛用していた本棚です。

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

\*

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で。

### 吉井明峯の答え

これは私のおばあちゃんが愛用していた本棚です。

兄の答え訳） これは私の本棚が愛用していたおばちゃん。

### 教師の「メント

あなたたちの兄弟愛を感じました。本人に聞いたところもつだつた  
みたいです。

「騙したな雄二ー。」

僕は教壇でふんぞり返っている雄二に教室に戻ってきてから一言。  
この男とは雌雄を決さないといけないよつだ。

「やはりそう来たか……うん？ 明久、なんで無傷なんだ？」

「ミネが助けてくれたんだよバカ雄二ー。 それより“やはり”って  
ことはこうなることを予想してたんじゃないか！ ミネが居なかつ  
たらどうなつていたと思つていてるんだー？」

「それくらい予想できいで代表が務まるかー。」

「開き直るなバカ雄二ー。」

「まあまあ、兄さん。落ち着け」

僕は雄二に向かつて散々文句言つたが、雄二はどこ吹く風と受け流  
していた。僕は納得いかず、さらに文句を言おうとするといいが止  
める。くつ、なんで止めるんだミネ！ こいつには死も上回る罰を  
与える必要があるって言つのにー？

「さすが学年屈指のブランだな？」

「……否定はしない。そう取られても可笑しくない行動をしているしな」

雄一の皮肉に何の反応も示さず、作業的に答えるミネ。その反応を見て雄一は面白くなげにしていた。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

僕は雄一に対する復讐案を考えていると、姫路さんと島田さんが心配げに駆け寄ってきた。つう、やっぱり姫路さんは優しいよ。ミネの次に。

「あ、うん。平気だよ？ 心配してくれてありがとう」

「やべ、良かった……ウチがまだ殴る余地はあるんだ」

「……ッ！」

僕は島田さんの発言に反応して咄嗟にミネの後ろに隠れる。雄一と無言の視線戦争をしていたミネは急なことで驚いていた。

「ツー？……島田、変な発言をするな。ただでさえ、お前に対して苦手意識を持つているところに」

「つづくべ、別に変なことを言つてないわよ」

「……（ハア～）」

「な、何よ！」

「……別に？」

ミネの言つとおり、僕は島田さんに苦手意識を持つている。特に暴力宣言されたときなんか……！ ミネは僕の頭を撫でながら、落ち

着かせよ」としている。少し情けないけど、これのおかげでだいぶ落ち着く。

「そんなことよ、今からミーティングを行つぞ

そんなこともお構いなく雄一は僕たちを引き連れて屋上に向かう。僕もミネと一緒に向かった。

「で、明久、ミネ。時間は伝えたのか？」

「うん、今日の午後からって伝えといたよ。だから先にお昼ご飯だね

「兄さん、今日の分の弁当」

「うん、ありがとうミネ」

俺は兄さんに弁当を渡して、昼食を食べ始める。他の奴らは俺たちの弁当を覗いているが、どうしたのだろうか？

「こつ見てもミネの料理は見事じゃのう」

「……主婦顔負け」

秀吉と土屋が弁当に關して評価していく。

「ありがとう。だが、俺より兄さんの方が料理は旨いぞ？」

「明久が？ 信じられねえよ」

「そうか？ 少なくとも赤髪<sup>アツラ</sup>よつばと上手だぞ？」

「てめえ……！」

「なんだ？」

坂本が突つかかってくるが俺は売り言葉に買い言葉で挑発する。不穏な空気が流れる前に兄さんに諫められたが。

「あ、あのー、吉井君ー、明日お弁当を作つて来ても良いですかー？」

「ほえ？……なんで？」

「えつと、それは……」

姫路がなにやら意を決して兄さんに弁当を作つてくれると言つが、このかたの子に弁当を作つてきてもうつたことのない兄さんはどうしてか尋ねる。姫路は顔を赤くして口もるが……俺としては遠慮してもらいたい。女性の料理は母以外、ろくな思い出がない。

「ふーん、瑞希って随分優しいのね。吉井“だけ”に作つてくれるなんて」

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「なに？ 僕たちにも？」

「はい、嫌じやなかつたら」

これを聞いて俺を除いて喜ぶ男子達。せつかくの女の子の手料理を食えるチャンスなので俺を除いて全員、お願いした。

「雑談はこの程度にして雄一ーよ」

「うん？ ああ、そうだつたな」

「なぜロクラスからなのじや？ 段階でふむならEクラス、勝負に出るならAクラスじやろつ？」

「ああ、そのことか」

坂本が少しもつたといぶるのよつたためる。俺としてせわつたと疑うと思つ。

「理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「えつ？ でも僕たちよりクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かつたかも知れないな。けど実際の所は違う。周りの面子をよく見てみる」

そう言われて兄さんは周りの連中を見る。そして一言。

「うん。『ゴリラ』が1匹とムツツリが1人、秀吉が1人、美少女が2人、弟が1人だね」

「誰が美少女だ！？」

「……（ポツ）」

「えつ、雄二とムツツリーーがどうして美少女で反応するの！？」

普通『ゴリラ』とムツツリだよね！？」

「誰が『ゴリラ』ですって！？」

「島田さんまで！？ どうしよう！？ 突っ込みが足りないよ！？」

「……わかった」

兄さんの言葉に對して各々の反応を示す奴ら。俺は意趣返しすることにする。

「雄二と土屋は“自称美少女”、島田は“自称『ゴリラ』”だな」

「なつ、誰もそう言ってないわよー！」

「反応するつて事はそんなんだろう？」

俺の言い分に反抗する島田。土屋も田で反抗してくるが、自業自得だろう？ 俺はいつか新聞部にこのことを話してやることにした。清水もどりしてこんな奴を『お姉様』と呼んで慕うのか分からない。

「まあ、要するにだ。姫路に問題がない今、正面からやり合つても

Eクラスとは勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦つても意味がないって事だ」

「じゃあ、Dクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ、確実に勝てるとは言えないな。だが、これも打倒Aクラスへの必要なプロセスだから問題ない」

場を空氣を仕切り直すかのように坂本が話し始める。というより最初からその話に移れよ。俺は内心愚痴る。

「でも、さっきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないわよ？」「心配入らん。負けるわけがないぞ。お前達が協力してくれるなら、どこの相手だらうと必ず勝てる」

……“お前達”か。俺はとうとう付き合えなくなり弁当をまとめて兄さんと共に席を立つ。

「いいか、お前達。俺たちのクラスは……ってどこの行く明久、ミネ？」

坂本が締めに入ろうとしたが、急に離れ始めた俺たちを見て疑問を投げかける。俺は坂本の方を向き、言い放つ。

「やるならお前達でやってくれ。俺と兄さんは抜ける」「なつ……ー？」

突然の宣言に驚く坂本。他の奴らも驚いている。いち早く驚きから立ち直つて俺に詰め寄る。

「何言ってやがんだてめえ！」

「別に良いだろ？」「

「いいわけねえだろ！？ 勝手なことするんじや……！」

「『いてもいなくて同じような雑魚』」

「……ツ！？」

「貴様がいつた言葉だ」

あの場で散々俺たち兄弟を罵倒してくれたんだ、Fクラスは。この俺がそのまま黙っているとでも？ 俺は興味なさげな目で坂本を見据える。

「いてもいなくともいいなら、面倒くさい試合戦争はお断りだ

「僕も同意見だよ、雄二」

それを最後に俺と兄さんは踵を返して屋上から去っていった。

俺は思わぬ事態に戸惑いを隠せなかつた。ミネは明久が協力すれば、絶対協力するはずだつた。明久自身もこいつ事には一番積極的に協力してくれると思つていた。それがまさかこんな事になるとは……。

「やはり根に持つていたのじゃな、ミネと明久は」

「でもこんな大事な時に協力しないって、我が儘よ！」

「あの、坂本君？ 大丈夫なんですか？ Dクラス戦は？」

突然の明久とミネの離脱に他の奴らも困惑している。くそつ、アイツらも含んでこれから試合戦争をやっていくつもりだつたのだが……俺はため息を吐きながら秀吉達の所に戻る。

「まあ、多少の変更はあるが大丈夫だ。教室で言つたとおりいても

いなくても同じようなものだからな。なんとかなるだね」「

「……お主らは本当に友達か疑いたくなるの」

「ひさへひせ……」

「 そ、 う よ 、 吉 井 達 が い な く て も 勝 て る わ む 」

卷之三

姫路の声が少し小さくなつたのが気になるがまあ、何とかなるだろう。俺はアイツら抜きでこれから試召戦争を勝ち抜いていくプランを作戦を説明しながら計画していくた。

## 第4話（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5208z/>

---

バカと兄弟と召喚獣

2011年12月28日20時52分発行